

一、『資本の攻勢に統一戦線であらば』『労働組合戦線の即時合同へ』『全国的単一産業別組合への促進』—これ即ち全国労働組合同盟が昭和五年六月一日の結成大會に於て可決確定されたる労働組合戦線統一に對する大方針である。

換言すれば、全国労働の組合戦線の統一の方針は全国的産業別労働組合の確立と、その大合同に依る單一同盟體への結成である。即ち今日尙ほ、左右分裂主義者に依つて叫ばれつゝある組合戦線二元論に對する戦線一元論の主張を絶對的なものとする處に全国労働の正しき階級的任務が約束せられてゐるのである。

然らばかゝる立場からする全国労働の當面の任務は何であるか、即ち現下の諸情勢に即して先づ強力なる共同闘争體を現實に實現せしめる必要がある。産業合理化反對、失業反對、労働立法獲得の諸闘争の爲めに全国労働組合會議及び地方的共同戦線體の組織機關を起し其の共同闘争を効果的に遂行すると同時に、其過程に於いて全国的産業別労働組合の確立に向つて協力し而して労働組合戦線の統一に到達せしむ可きである。

二、かゝる方針と任務遂行のために成されたものが即ち全国労働、總聯合其他の労働團體の共同提唱に依る昭和六年一月の全国労働組合會議準備會である。全国労働が友誼團體と協力して全国労働組合會議の成立を計畫せる事實そのものはかゝる統一方針の使命を遂行せんとしたものであつたが、然しながら所謂右翼六團體は此の組合會議への参加勸誘に對しサボタージュを行ひ、参加拒絶の態度を取るに至つた。否單なるサボのみでなくして前記組合會議に對立的な組合會議を労働立法促進委員會を改組して組織せんとする意圖と計畫さへ示すに至つた。

斯くて彼等右翼團體の一部は、飽く迄大衆の要請を無視し部分的に運動を固定化せんとする態度に對して全国労働中央委員會が、組合會議を通じて日本労働クラブ結成運動を行へる事情と云ふものは、全国労働の全的統一の方針からして必要にして正しいものと云へる。

三、今日、労働クラブに對して、一部のジャーナリズムや、無責任なる批評家は、クラブを稱して大右翼結成なりと謂ふ、全国労働はその本来の階級的戰闘的精神を放棄して右翼協調主義へ轉落せりと呼ぶ、又總同盟其他一連の團體は右翼派の勝利なりと呼號する。

だが然し、全国労働の本来の歴史的の使命を知るもの、統一方針の戰略を解するもの、現下日本の組合戦線の分布と客觀的状況を明確に認識する者は絕對にかゝる放言はなさない筈である。吾々がかゝる無責任なデマに對して一言だけ云ひ度い、試に全国労働が彼等の云ふが如き左翼結成をなさんとする場合、その對照主體は何處に在るか、全協へと云ふならば自ら別個である、吾々は單なる觀念上の左翼や革命的言辭に依つて粉飾されてゐる人々の理論的遊戯の對象とされて其の實力の養成を忘れられないのである。

右翼精神の勝利なりと隨喜する總同盟の幹部諸公は、起死回生の見透しの全然ない没落期資本主義の彈壓下に廣汎なる労働者軍の××的な反抗と闘争の戦野への進出の足どりに眼を掩ふて右翼精神の勝利なりと主張し得るか、とも反問したい。

四、殊に全国労働の統一論を正確に認識し此れが具體性に立脚し全國の労働階級の強力なる結集力と闘争力を希ふものは、此の労働クラブに對して積極的に働きかけて、該クラブをして將來への全國的戦線統一の拍車たる全国労働組合會議への改組たらしむるの努力が果さる可きで、此の目的の遂行に障害を與へ乃至は協力を借さざる者は口如何なる階級的、革命的理論を叫ぶとも實踐に於いては分裂主義者であり階級的裏切者であると信す。

勿論我々は日本労働クラブが統一戦線完成への過程的組織として見る場合に於て完全なるものとは斷じ得ないが、それは今日迄の歴史的の對立關係からして懸念するものとして此れが完璧性は今後の全国労働の努力に待たる可きであると思ふ、此の爲めに我等はクラブに對する方針を右の如く規定して全国労働中央委員會のクラブ加盟決定を支持せんとするものである。

實行方法

一、具體的方針は中央委員會一任

日本労働クラブ絶對排撃に關する件

關東金屬産業労働組合